

東大世界史 2015年 解答速報

解答速報の作成方針

- 東京大学の方針に合わせて、①高校世界史の知識の範囲内であること、②問題文の指定にしたがっており論理が通っていること、③表現が日本語として適切であること、の3点に留意して作成しました。
- この解答速報の作成にあたっては、他の塾・予備校・教師の解答や解説を参照していません。東大世界史講師が独自に作成したものです。
- この解答速報は、公開された入試問題を見た当日中を期限として作成したものであり、内容には注意を払っておりますが、絶対的・完全な答案というわけではありません。ご了承ください。

第1問

5	13世紀後半までにユーラシア大陸の広範囲を支配下に置いたモンゴル帝国は、陸上では <u>ジャムチ</u> を、水上・海上では中国の <u>大運河</u> や海運を整備するなど交通の整備を進め、また銀を基本として <u>交鈔</u> も組み合わせた貨幣制度を整えた。こうしてモンゴルの覇権のもとで交通・商業ネットワークの整備が行われたことを背景に、 <u>経済的・文化的交流がさかんになった。</u>	モンゴルの覇権→交通・商業の整備→交流と書くときれい 交流の背景となる、モンゴルの覇権と交通・商業の整備について説明しておいた
10	<u>経済面</u> では、ムスリム商人が陸上交易で活躍するとともに海上でも <u>ダウ船</u> を使用して活発な交易を展開し、そのほか中国商人は <u>ジャンク船</u> を使用して海上貿易を行い、イタリアの商人も地中海で <u>東方貿易</u> を行った。これらの商人を通じて、中国からは <u>染付</u> などの陶磁器がイスラームなど西方へ輸出され、銅銭が <u>博多</u> などを拠点として日本へと流入し、また香辛料などのアジアの物産がヨーロッパへもたらされたが、こうした交易の活発化は	経済面における交流について 主な商人の活動を示した 交易と品目について
15	<u>ペスト</u> がヨーロッパに伝わって流行する背景にもなった。 <u>文化面</u> では、中国からは絵画がイランの <u>ミニアチュール</u> の発達に影響を与え、禅宗などの文化が日本へと伝えられた。イスラーム世界からは天文学が中国に伝わって <u>授時暦</u> に影響を与え、イスラーム教はムスリム商人を通じて広められて東南アジアやインドでイスラーム化が進んだ。このほかにも人物の往来を通じた情報の伝達や宗教の布教が行われ、	博多は難しいが日元間の交易の拠点とさえわかれば十分 文化面の交流について 中国からの文化の伝播 イスラームからの文化の伝播
20	<u>マルコ=ポーロ</u> はアジアを旅行してその情報を西欧へ伝え、 <u>モンテ=コルヴィノ</u> は <u>大都</u> へ赴き中国でキリスト教を布教した。	その他の交流として、人物の往来を書いておいた 交流の部分は整理の仕方は他にもいろいろ考えられる

第2問

<p>(1)</p> <p>(a)①ユスティニアヌス（1世／大帝） ②トリボニアヌス</p> <p>(b)イギリスの模範議会など身分別の代表が国政について審議する議会で、君主の必要に応じて開催され主に課税の承認などを行った。</p>	<p>具体例・性格・君主との関係をそれぞれ必ず示すこと</p>
<p>(2)</p> <p>(a)律・令・格・式の4種に区分され、律は刑法、令は行政法や民法、格は律や令の補充法・臨時法、式はそれらの施行細則を指した。</p> <p>(b)中書省が詔勅を起草し、門下省がその審議を行い、尚書省が施行を担った。六部は三省のうち尚書省に属し行政の執行を分担した。</p>	<p>書き方はいろいろあるが、名称と内容を確実に示すこと</p> <p>三省の役割の分担と、三省と六部との関係を明確に示す</p>
<p>(3)</p> <p>(a)①プーシキン ②トゥルゲーネフ</p> <p>(b)自由主義者の要求を容れて十月宣言を發し、市民の自由を認めるとともに立法権をもつドゥーマの開設や内閣制の導入を公約した。</p>	<p>文書の名称を示しつつ対応の姿勢や内容をしっかり書く</p>

第3問

<p>(1)武器貸与法</p> <p>(2)イエズス会（ジェズイット教団）</p> <p>(3)全斗煥（チョンドウホァン）</p> <p>(4)袁世凱</p> <p>(5)ラーマ5世（チュラロンコン）</p> <p>(6)ナポレオン</p> <p>(7)ポンディシェリ</p> <p>(8)ナセル</p> <p>(9)プトレマイオス</p> <p>(10)ド＝ゴール</p>	<p>(4)は解答を特定することが難しいが袁世凱を答えることが求められていると考えられる</p>
	<p>(5)はラーマ4世と区別することが難しいが、軍事・行政・司法の近代化を行っているのはラーマ5世のほうである</p>